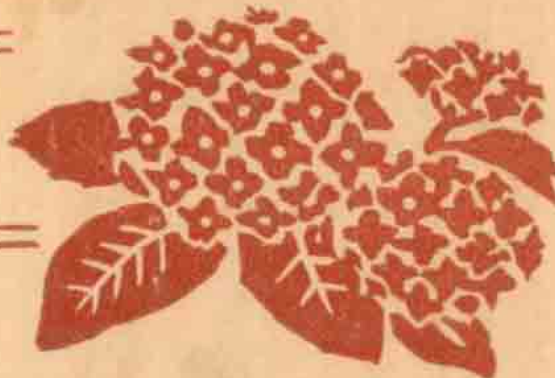


角川文庫

—3642—

幻の墓

森村誠一



角川書店



昭和五十一年三月二十五日 初版発行

定価は、カバーに
明記してあります

角川文庫
まぼろし 幻 の 墓 はか

著作者 森村誠一

発行者 角川春樹

印刷者 中内佐光
東京都文京区関口一ノ二四ノ八

発行所

●東京都千代田区富士見二ノ十三
一〇二 ●東京一九五二〇八

株式会社 角川書店
電話東京(265)三二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

曉印刷・本間製本

0193-136512-0946(0)

幻 の 墓

森 村 誠 一



角川文庫

■3642

私はいつも

幻の墓を描く

氷河を氷窟に巻く

尖峯の絶巖に

おおかたの日の明け暮れは

氷霧によって

その墓は……閉ざされていよう

稀に恵まれた日の朝なれば

それは薔薇色に粧われてあろう

寂しく荒れた形を

空間に懸けて。

(一部抜粋)

——富田碎花

目次

復讐 <small>ふくしゅう</small> のザイルパートナー	五
水の上には九人	二〇
毒花へのアプローチ	三四
肉と金	五〇
穂高急行	六三
腐肉の岩壁	七六
並走車恐怖症	九〇
波久礼 <small>はぐれ</small> 心中	一〇五
スピロヘータ病源体	一二〇
哀 <small>かな</small> しきは愛の形見	一四〇
毒架橋	一五三
偽ご料車	一六一
幽霊旅券	一七五

肉食獣	一九二
新株引受権	二〇八
粉飾の花	二二〇
蟻螂の正体	二三四
報復攻撃	二四七
黒幕隊長	二五四
ホテル大東京 <small>オペレーション</small> 作戦	二六七
鉄壁の崩壊	二八一
目には目を	二九〇
姿なき狙撃者	三〇〇
虚なる復讐者	三三四
幻の墓	三三八

解説

中島河太郎 三三三

復讐ふくしゅうのザイルパートナー

1

昭和三十×年一月末日、東京、明和化成、品川工場でPOガス（プロピレン・オキサイドガス）タンクが爆発し、百数十人の死傷者を出すという大惨事をおこした。

石油化学工場での大爆発はこれがはじめてのケースである。装置産業といわれるほど装置に金を費し、事故防止にも万全の注意が払われているはずの近代的新鋭工場の事故だけに、当局も重視し、原因と責任の追及に乗り出した。

ところが、当初の意気込みに反して、終局においては、当時、工場内で下請作業をしていた名城建設の資材処理の不手際ということになった。

加えて、事件の鍵を握ると目される名城建設社長、名城高太郎なしろこうたろうがその事故爆発で死亡してしまったため、事故の責任は曖昧あいまいにばかされてしまった。

それから、約一か月後の二月末日、東京、大和物産の粉乳にヒ素が含有されており、乳幼児患者が続出している事実が、新聞、マスコミにより一斉に報道され、乳幼児をもつ全国の家庭に大

きなショックを与えた。さらに数日後、大和物産は新聞紙上に謝罪広告と製品回収の言葉をのせたが、時すでに遅く、一万人に近い乳幼児がこの毒粉乳により中毒になっていた。その中、死亡者十七人、重症者六百十七人、中軽症者七千八十二人にのぼり、疑似患者を合わせて約八百人が幼い身体を病床にしぼりつけられていたのである。

調査の結果、この毒乳は同社の川崎工場における一年前の九月××日以降の製品であり、十月初旬から、全国市場に出廻ったとしても、ヒ素が粉乳に入っていると判明したのは翌年二月中旬であるから、実に四か月近くもこの毒物が全国にばら撒かれ、陽の目をみたばかりの幼い生命が危険に晒されていたわけである。

当時の厚生大臣はこれを重視し、真因の究明に乗り出したが、結局、川崎工場の一製造部長の個人的思いつきにより、本社に無断で第二リン酸ソーダを乳質安定剤として使用したことが判り、会社の責任は検察陣を満足させるだけの材料も出揃わないまま何となくぼかされてしまった。

事件後、この製造部長、美馬竜彦が泥酔運転による事故死をとげたため、責任追及の世間の耳目はこの製造部長一個人に集中した。ために会社側は単に「被用者の選任監督につき過失があったもの」と推定され、民法上の使用者責任を追及されたにとどまった。

この二つの事故は互いにあい接して発生した上に、どちらも日本の代表的会社がからんでいただけに当時の世間の耳目を集めた。

それから約二年の歳月が流れた。

二月末の風の強い冬晴れの日、北アルプス、後立山連峰うしろたてやまの五竜岳から信州側に派生する遠見尾根の、見晴らしのよい一角に二人の若い登山者が立った。

二人の名前は名城健作なしろけんさくと美馬慶一郎みまけいいちろう、共に伝統ある東都大学山岳部のヴェテランクライマーである。

「アルプスともこれでお別れだな」

美馬がポツンと言った。

「別れじゃないさ。また俺達おれたちはきつと戻って来る」

名城が言った。低いが執念のこもった語調である。

「そうだったな。俺達はこれを別れにしてはならないのだ。いつの日か、またアルプスへ戻り、二人でザイルを結んで、あの鹿島槍北壁かしまやりをやる約束だった」

「そうだ、その約束を忘れるなよ」

二人はカクネ里の谷をへだてて、眼前に聳立しょうりつする北アルプス名うての岩壁「鹿島槍北壁中央フエース」に眼を投げた。

鹿島槍北壁——それは鹿島槍ヶ岳の頂からカクネ里かくなりの急峻きゆうしゆんな雪渓まで、巨大な斧おのでそぎ落とし

たような高距数百メートルの凄絶な岩壁である。夏は不確定な泥まじりの草付にはじまる逆層の岩肌は、手のつけようのない悪さでクライマーを拒絶し、そして冬期は蒼氷と雪で一寸の隙もなく武装し、間断ない雪崩と落石をもって登山者を追い落とす。

特に中央フェースは幾多の勇敢なパイオニアにより殆ど開拓されつくした日本アルプスの中で、依然としてアルピニストの足跡を許さない悪絶の壁であった。

「そして、あの壁の初登攀こそ俺達の夢だった。東都大山岳部が創立以来の課題の北壁は、そのまま俺達の青春の課題だった」

美馬慶一郎は遠い目をして言った。彼らが鹿島槍北壁に憑かれてからどの位の歳月が流れたことだろうか？ はじめて、二人が鹿島槍を知ったのは、小学生の頃であった。家が隣り同士であったところから親しくしていた両家が、合同の家族旅行で信州へ行った時である。蓼科温泉や、美しヶ原で楽しく遊んだ両家は、旅の最後を山の湖で過ごすべく、青木湖へやって来た。

時、折りしも五月、緑濃い前山を従えて空よりも深い水色の湖面に投影している鹿島槍ヶ岳の秀麗な姿は、幼い二人の心に鮮烈に焼きついた。

それから、二人の長い山歴がはじまる。中学、高校時代に日本中の名だたる山は殆ど踏破した二人は、いつの間にか鹿島槍周辺に戻って来た。初めての山は初恋の女性のように忘れられないものなのか？

そして高校を卒える頃には彼らは鹿島槍周辺のありとあらゆる登路を登りつくし、多くのアル

ピニストがそうであったように、彼らも何人をも寄せつけない北壁への誘惑に強くひきずりこまれていったのである。

彼らは度重なる鹿島槍入山で、同じ鹿島槍を課題としている東都大山岳部の猛者連と知り合った。伝統あるこの山岳部は、鹿島槍を部の創立以来「課題の山」として取組み、そして事実、彼らの努力によって、無雪期、積雪期を通して、鹿島槍周辺の殆どすべてのルートは拓り開かれてしまった。

その彼らの強力な部の総力を結集しても陥せないのが鹿島槍北壁だったのである。

——何としても登る——

それは東都大山岳部の責務というよりは執念となっていた。そして、名城と美馬は鹿島槍北壁を登らんがために東都大に入り、東都大山岳部に入りたいがために東都大を選んだのである。

「何としても登る」

美馬慶一郎はふたたび言った。これでよく山登りができると疑われるほどに薄い胸の青年である。胸ばかりでなく、唇も薄く目も細い。全身に何となく病的な青白さをもっていたが、瞳にたたえられた強い光がそれを救っていた。

この腺病質な男がヴェテランクライマー揃いの東都大山岳部においてすら、誰も右に出る者のない天賦のバランスをもっていた。

「しかし」

名城健作がひきとって言った。これはまた、美馬とは対照的に骨太の青年である。角ばった顔に角ばった目、唇も土人のそれのように厚い。

全身から若者の精気がムンムンと発散する。部ずい一の馬力屋で、「ジープのケン」の異名があるこの名城の馬力と美馬のバランスが組合コンビされて、絶妙のザイルパーティーとなるのである。

「俺達はその青春の課題を捨てなければならなかった。俺達のおやじを殺し、家庭を破壊し、俺達一家のささやかな幸福までめっちゃめっちゃにしてしまった奴らに復讐するために——」

北壁に吸われていた彼の目は憎悪に光った。

強風が足許あしもとからたえず小さな雪煙を舞い上げている。後立山の稜線に傾きはじめて太陽は、次第に落日の朱の色を増している。北壁を刻む陰翳いんえいがようやく深く深くなってきた。

ややあって今度は美馬慶一郎がひとりごちるように言った。

「お前の親父さんは明和化成の下請けで、あの事件の当日、自社の資材を積んだトラックを品川工場に廻していただけですべての罪をかぶせられてしまった。トラックから漏出した重油に引火し、タンクを過熱したためにまねいた事故だと言うんだな。引火の原因は、名城建設のトラックが工場敷地内を無謀運転して、明和のタンクローリーに衝突したからだそうだ。しかし、トラックの運転手は無事故歴三十年の人間だ。しかも、親父を側に同乗させて無謀運転するわけがない」

美馬慶一郎は不幸な追憶を語り続けた。かたわらに名城の牛のような身体がうずくまっていた

が、美馬の口調は別に彼に語りかけているものでもなかった。

不幸な追憶——それはそのまま彼ら二人にとって憎しみの記憶であった。

……その日、名城建設のトラックは問題のタンクのそばに行く必要が全くなかった。そこら何となくきなくさいところなのだが、名城建設に不利な証言ばかりで、有利な証拠は何一つなかった。考えてみれば、明和化成の工場で明和の関係者ばかりの中で起きた事件である。彼らに不利な証拠を抹殺するに何の妨げもない。勿論、名城健作は争った。しかし、彼の父も運転手も、トラックと共に焼け死んだ。死人に口なし。検察もすべての物的人的証拠がクロと指す名城建設に冷たかった。加うるに、明和化成社長黒木一郎は名城建設に対し、「過失により他人の権利を侵害した」ものとして、民法上の不法行為の損害賠償責任を追及してきたのである。

これは明和化成の責任を名城建設に転嫁すると同時に、被災者の怒りを名城高太郎にすりかえる一石二鳥の実に巧妙な手段となった。世間はまんまとこのトリックに乗せられ、明和化成の責任は名城建設という隠れ蓑にすっぽりと隠されてしまったのである。それだけではなかった。被災者の補償責任すら名城建設が負わされたのである。明和化成は単なる債務の保証人のような立場に立ってしまった。健作は名城家の私財のすべてを投げ出して被災者に詫びた。健作の母はショックで錯乱し、精神病院に入院、まだ回復の萌しもないのである。健作の弟妹達は親類に別れ別れに引き取られた。それを明和化成は相続の放棄も分離もしない健作に対して損害賠償の請求をしてきた。そして、遂に、名城建設に黒木の長男、正武を社長として送りこんだのである。骨

まで啄つばむ禿鷹はげたかのように、彼らは名城建設を賠償のかたに乘取った。

二月といえは山は厳冬である。まして夕暮ともなれば風は針を含む。話す美馬もきき入る名城も唇は紫色であった。しかし、彼らは寒さを全然感じていない。二年前の事件が彼らの胸の中でふつふつと煮えたぎっていたからである。

美馬が黙すと今度は名城が口を開いた。

「そして、それから一か月後には今度はお前の家に不幸が訪れた。当時、大和物産の川崎食品工場の製造部長だったお前のおやじさんに、本社から乳質の悪い原乳が大量に送られてきた。そして粉乳には向かないというおやじさんの抗議を無視して、本社は乳質安定剤としてあまり例のない第二リン酸ソーダを使用するよう命令してきた。技術者の良心にかけておやじさんは反対した。しかし、本社は諸外国で用いているとか、文献にあるとかを理由に命令をおしつけてきた。それでなくとも、一製造部長の意見など社命の前に蹂躪じゅうりつされた。一か月百二十石の率で遠隔地から集まる原乳を、単に品質がよくないという理由だけで営利会社が捨てるわけにはいかなかった。営利の前にはあらゆることを正当化するのが企業なのだ」

名城健作は美馬慶一郎の憎しみの記憶を代弁した。あたかも、自らの家の幸福を奪い去ったものへの憎しみを吐き出すように。

二人が山で分かち合った青春は、互いに相手の喜びも悲しみも自分のもののように覚える、強い友情と連帯を培っていた。

……美馬慶一郎の父、竜彦は即刻辞表を提出した。しかし、それはいったん受理されながら、万一の場合に備えて、解雇手続きは保留されていた。竜彦が家にひきこもっている間にこの毒ミルクは無限に製造され、全国にばら撒かれていったのだ。やがて、竜彦の虞おそれていた通りの事態が発生した。しかし、竜彦としてはサラリーマンの生命を賭としてまで戦ったのである。嘗々二十年の勤続の果てに、ようやくかち得た部長の椅子を棒に振ってまで反対したのだ。個人が巨人会社を相手どってこれ以上の何をすることができたか？ 彼の社会的責任は殆どないと言っただけだった。

しかし、ここに奇々怪々なことがおきた。竜彦が辞やめたとはばかり思っていた会社は依然として彼の籍があり、しかも、毒ミルクの製造は彼の個人的差し金で行なわれたというのである。竜彦は最初は愕然がくぜんとし、次に激怒した。勿論、彼には強みがあった。本社の指令書と自分の反対意見具申書のコピーだ。それに、自分の辞表は毒ミルク製造前に人事課により受理されているのである。

竜彦は証拠書類を手に気負い立って出社した。

その夜のことだった。彼のブルーバードが竹橋付近の高速道路でガードレールを突き破り転落したのは。原形を留めぬまでに圧壊したブルーバードの中に骨まで砕けた竜彦の死体が発見された。死後の剖検で死体から多量のアルコールが検出された。泥酔運転。——大和の幹部は言った。美馬部長は平素はおとなしいまじめな男ですが、いったん酔うと自己を失うタイプでした。そ

れに技術者として非常に自負心の強い人間で、技術上の発見や新企画を直ちに商品化しようとする悪いくせがありました。本社としては長い時間をかけた実験と研究の成果だけを、はじめて商品にとり入れるのですが、彼は本社が許可しないと、独断でやりかねませんでした。この度の毒ミルクによる業務上過失致死事件は、美馬部長のアルコール性痴呆症と技術者としての過大な自負が結合して招いたものと言えます。——と。

不思議なことに、竜彦の死後、問題の指令書は影も残さず消失し、辞表だけが「不受理」として美馬家に送り返されてきたのである。以前から心臓弁膜症で寝こみがちな慶一郎の母は、竜彦の人間の姿を失った死体を見せられて、心臓麻痺をおこして死んだ。それが丁度、慶一郎が冬山合宿で留守の時のことである。彼が山に行かなければそんなことにはならなかったろうが、会社側は死体を確認するという名目で強制的に二人を「対面」させたのである。……

「大和物産は勤務時間外における過失死と主張して、労働基準法による補償すらしなかった。通夜に立ちあったのはお前と山岳部の連中だけだった。お前の親戚も世間の非難を集めているお前の一家に寄りつこうとしなかった。寂しい告別の後、俺達はお前の両親を葬祭場へ運んだ」

名城がここまで言った時、後立山の鋸歯状の稜線に太陽の下端が触れた。雪をまとった岩壁が血のような色彩で彩られた。西空の茜は東に移るにつれて黄昏の藍に変わり、安曇野はすでに蒼茫と暮れなずんでいる。二人は共に落日を見た。四つの瞳の中に四つの日輪が燃えた。それは彼らの全身にたぎるやり場の無い怒りを象徴するように赫く燃えていた。

「俺は坊主の読経の背後に轟々と燃える炎の音を聞いた、両親の死体を焼く炎の音を、彼らの肉が焼けただれ、脂を噴き、灰となって崩れ落ちる音を。そしてそれら凄惨な音の背後にはっきりと二人の声を聞いた。」

「私達は殺されたのだ。慶一郎よ、復讐しておくれ」

二人の声は俺に訴えた。その時なのだ。俺が自分の心にかたく復讐を誓ったのは」

美馬が名城の代弁を引き取って語り始めた。語るほどに彼の青白い頬が紅潮してくる。言葉に表現することによって、胸の中にかたく秘めていた怒りがあふれかえってくるからである。

「俺は誰におしえられるまでもなく、親父が殺されたことを知っていた。解剖所見によれば親父の血液中アルコール濃度は〇・五％だったという。〇・五％と言えば泥酔量だ。成程、おやじは酒は好きだったが、そんな馬鹿飲みは決してしなかった。誰かに、無理矢理に飲まされたのだ。彼らは泥酔したおやじをブルーバードに乗せ、何らかの方法で車を操り、ガードレールを突き破らせ、地獄へ突き落とされたのだ。証拠のすべてを抹殺した殺人者は、今頃、ピラミッドのてっぺんで笑っているだろう。しかし奴らをいつまでも笑わせておくことはできない。おやじのために、俺達のために、そして、死んでいった多くの赤ん坊のためにも」

「だが、俺達は復讐の計画を二年間延ばさねばならなかった。当時、東都大二年であった俺達